

# 「読み」に困難のある子どもの幼児期の特徴についての一考察

－支援者の困難に対する気づきから－

宮 本 直 美\*

## A Study of Early Childhood Feature of Children with Reading Difficulties

－From an Awareness of Reading Difficulties of Supporters－

Naomi Miyamoto

---

【キーワード】 読み困難, 幼児期, 気づき, 支援者  
reading difficulties, early childhood, awareness, supporters

### 1. はじめに

#### (1) 幼児期における読みの困難に対する認識の必要性

幼児の中には、まだ文字の学習が始まる前にも関わらず、自分の名前を指し示したり、絵本の読み聞かせで覚えた文を、さも文字を読んでいるように読み聞かせてくれたりする子がいる。多くの幼児は発達していく中で文字に興味や関心を持ち、文字の読み方を覚え、覚えた文字を読みたがる。

我が国における幼児期のひらがなの読み書きについて、最初に全国的な調査を行ったのは国立国語研究所（1972：38-92）である。その調査と同様の方法で、幼児期の読みについて、島村・三神（1994）、太田・宇野・猪俣（2018）がそれぞれ調査を実施している。それらによれば、年長児において、ひらがな71文字における平均読字数は順に、53文字、65.9文字、64.9文字であり、その割合は74.6%、92.8%、91.4%であった。この約50年間において年長児のひらがなの習得率は上昇し、清濁音のひらがなをほぼ読むことができる状態で小学校に入学していると考えられる。

その一方で、どの研究結果も、ひらがなの読みの習得が遅い幼児は一定数存在していることを示している。「読み」に困難のある子どもは、幼児期の発達過程の中で獲得される読みに関する能力を獲得できていないか、獲得するまでに時間を要すると考えられる。そのため、「読み」に困難のある子どもは、小学校入学後から始まる学習の中で、読みの困難が明らかになっていく。今井・西山（2016）は基本的な読みの困難さは自然に解消されるものではないと述べており、「読み」に困難のある子どもへの早期発見と早期支援は欠かせない。

年長児は清濁音のひらがなをほぼ読むことができることから、「読み」に困難のある子どもの幼児期における読みの様相を明らかにすることができる。様相が明らかになれば、「読み」に困難のある幼児を早期に発見することができる。小学校から始まる学習は読み書きを基盤とし、「読み」に困難のある子どもは、入学後から困難を抱えながらの学習になることを防ぐために、幼児期の読みの様相を明らか

---

所属および連絡先  
\* 大阪千代田短期大学

にすることには意義があると考える。

## (2) 問題提起と目的

幼稚園教育要領及び保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下、幼稚園教育要領等）（2017）では、領域「言葉」における内容として「(10) 日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう」とし、内容の取扱いでは「(5) 園児が日常生活の中で、文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心をもつようにすること」としている。つまり、幼児期は文字に興味や関心を持つことが主となるため、文字を読まないとしても、それを問題としてとらえる事は少ないと推測される。

幼児を対象とした読みの認知能力についての研究は児童期に比べて少ないものの、幼児期のかな識字における能力（垣花ら 2009）、読みと非語の復唱の関連（迫野・伊藤 2015）など、いくつかの認知能力について明らかにされている。読みに困難のある幼児についての事例研究も児童期に比べて圧倒的に少なく、幼児期の読みの様相については、各事例研究において「文字に興味を示さない（上村・森山・高橋 2009）」「ひらがなを覚えない（福田 2018）」など、個々別々に明示されてはいるが、「読み」に困難のある幼児の様相として明らかにされていない。しかも文字に関する事象について、周りの大人たちは認識してはいるが、「小学校に行ったら読めるようになる」「ひらがなを学習していないからだ」と考えるからか、幼児期から読みに関する支援が開始されることは少ない。

しかし、「読み」に困難のある子どもは、入学後に読みに困難が生じるのではなく、読みの困難が明らかになるだけである。原（2008）は、学習活動ではどの科目においても文字の読み書きの比重が大きいくこと、読み書き障害の重症度には幅があり、軽度の場合は小学校中学年以降に徐々に明らかになると述べている。

「読み」に困難のある子どもは、乳幼児期から始まる一連の読みに関する能力の発達過程の中で、読みに関する認知能力のどこかに機能不全を起こしていたり、その発達の速度が比較的緩やかであったりすると考えられる。よって幼児期においても読みの困難に関わる事象は表れており、周りにいる家族や保育者たちは多かれ少なかれその様子を目にしていると考えられる。「読み」に困難のある子どもの幼児期の様相について明らかにしておくことは、読み困難の早期発見や早期支援に結びつくと考えられる。

## 2. 方法

### (1) 研究の目的

「読み」に困難のある子どもの幼児期における様相を出版されている文献から明らかにする。

### (2) 研究方法

幼児期に読みの困難が明らかになった事例及び児童期に読みの困難が明らかになった事例の先行研究を対象にする。各事例研究から、「読み」に困難のある子どもの幼児期の状況として、障害の診断の有無や発達の状況、保護者や保育者、支援者が気づいた幼児の読みに関する様子や困難について記述した

事項を抽出して分析する。

### ①幼児期及び児童期に読みの困難が明らかになった事例の抽出

国立情報学研究所が提供する文献情報・学術情報検索サービス CiNii Articles を使用し、データベース検索を 2020 年 6 月に行った。特別支援教育が本格的に開始された 2007 年度における事例研究が発表されたであろう 2008 年～2020 年の論文を対象とした。キーワードに「読み」「児童」と「困難」「支援」及び「読み」「幼児」と「困難」「支援」をかけ合わせて検索を行った。キーワード検索の結果、児童については 280 件が、幼児については 78 件が該当した。それらの中から、原著論文であるものを対象にして、幼児期と児童期に読みの困難が明らかになった事例で、視覚障害や聴覚障害等、読みの困難が身体的な困難からくる場合を除いて、論文を抽出した。その結果、本研究では 34 件を分析対象とした。

### ②事例からの抽出項目の選定

該当した事例研究から基本的な情報として、「学年」「性別」「在籍学級」の 3 項目と、読みに困難があると認識された学年を「困難認識学年」、何らかの支援が開始された年齢を「支援開始学年」として抽出した。また、何らかの障害について診断あるいは疑われた事例は、「障害名」「診断時期」も併せて抽出した。幼児期の状況については、家庭での生活の様子と保育現場において見られる様子とし、家庭や幼稚園、保育園等での普段の生活の様子、文字や読みに関する様子を中心に「幼児期の状況」として抽出した。抽出する際は、可能な限り文をそのまま抜き出すようにした。

各事例の論文で表記されている学年と、実際に困難が見られた学年が異なっている事例があった。その事例については、本研究の目的に基づき、読みに困難が実際にあると保護者や保育者、支援者が気づいた学年、または検査等から読みの困難が明らかになった時の学年を優先して学年を補正した。

### ③事例からの抽出事項「幼児期の状況」の分析

分析するにあたり、質的研究方法のひとつであるテキスト分析の手法として、樋口耕一により作成されたフリーソフトである KHCoder (Version3. Beta.01g:2020) を使用した (樋口 2020)<sup>1)</sup>。表 2 の「幼児期の状況」に記述した文を分析する前に、文中の語の補正を行った。多動性障害の状態やその困難さは ADHD の状態に含まれると考え、多動性障害を ADHD とし、広汎性発達障害は自閉症スペクトラム障害に含まれると考え、自閉症と表記した。抽出した事項を語と語に分け、抽出された語の出現数を求めた。その後、どのような語と関連して使われているかを調べるため、出現パターンの似通った語の組み合わせを明らかにする、共起ネットワーク分析を行った。「幼児期の状況」の特徴となる語から幼児期の様相を明らかにするという本研究の目的により、ノードを出現数 3 回以上の単語、リンクを Jaccard 係数の上位 60 までの共起関係とし、分析を行った。共起ネットワークの図は、サブグラフ検出を実施した。サブグラフ検出では、比較的強く結びついている部分ごとに同じ色で表現され、結びつきの強い語は実線で、弱い語は破線で結ばれる。また、抽出した全ての語を関連の強さでグループ化して分類するため、階層的クラスタ分析を行った。

### 3. 結果

#### (1) 「読み」に困難のある子どもの幼児期の状況が記述された事例の概要

分析対象とした34件の事例研究のうち、幼児期に言葉の遅れや読みの困難があることが分かり、支援が開始された事例は5件（事例1、2、3、4、5）（15%）であった。入学後に読みの困難があることが分かり、支援が開始された事例は29件（85%）あり、このうち、幼児期の状態について述べている事例は8件（事例6、7、8、9、10、11、12、13）（24%）であった。明らかに「dyslexiaだと診断された。」と記述された事例は1件（3%）であった。自閉症スペクトラム障害（広汎性発達障害を含む）やADHD、構音障害等、何らかの障害が記述されていた事例は14件（41%）であった。34件のうち、幼児期の状況に関する何らかの記述があった事例は13件（38%）であった。この13件を対象にして「読み」に困難のある子どもの幼児期の状況について分析を行った。各事例の「診断時年齢」「障害名」「困難認識学年」「支援開始学年」「支援を受けたときの主訴」を表1に示す。

表1 事例の障害名及び読み困難認識学年と支援開始時の主訴

事例	著者(年)	診断時年齢	障害名(疑い含む)	困難認識学年	支援開始学年	支援を受けたときの主訴
1	船橋・惠羅 馬場・田中 秋山 (2013)	3歳	広汎性発達障害	年中	年長	こだわりが強い。文字をなかなか覚え ない。
2	上村・森山 高橋 (2009)	/	/	年長	年長	言葉の遅れ。
3	坂野 (2011)	5歳2か月	広汎性発達障害 ADHD 知的障害	年長	1年	軽度の知的障害と感情のコントロールが 困難などから特別支援学級に入級後、支 援を受ける。
4	青木・室谷 増南・松沢 高野・岡崎	3歳	ADHD	年長	年長	集団での指示が通りにくく落ち着きがない。 教室から飛び出すこともある。
5	前川 (2013)	不明	多動性障害	年長	年長	医療機関で服薬を勧められたが、教育的 な関わりの中で出来ることを考えたいと して、教育相談室に来室。
6	石塚・増子 佐賀・金曾 大窪・小林 濱野 (2018)	/	/	年長	年長	発達上の困難。
7	上村・森山 高橋 (2009)	/	/	1年	3年	学習の遅れ。
8	芳倉・玉村 (2015)	不明	dyslexia	1年	1年	ひらがなの習得が困難。学校や家庭での 行動上の問題がある。
9	福田 (2018)	/	/	1年	4年	漢字の読み書きが困難。
10	岩山 (2019)	/	/	1年	2年	読み書きを始めとする学習に課題があ る。友達を叩くなどのトラブルがある。
11	氏家 (2019)	/	/	1年	1年	国語の授業での離席。家庭でも落ち着き がない。
12	山下 小野寺 (2019)	幼児期	知的障害 自閉症	1年	2年	保護者：全く読むことができない。 本人：読むことができなくて、勉強が難 しい。
13	横山・武藏 (2015)	2歳 6歳	広汎性発達障害 ADHD	2年	3年	学習意欲低下への心配と国語のつまずき への指導。

注. /は論文中に記載がなかった箇所である。

## (2) 「読み」に困難のある子どもの幼児期の状況における記述の抽出事項

各事例において、保護者や保育者、支援者が気づいた「読み」に困難のある子どもの幼児期の様子や困難の記述から抽出された事項を「幼児期の状況」とし、その結果を表2に示す。

表2 「読み」に困難のある子どもの幼児期の状況

事例	学年	性別	在籍学級	幼児期の状況
1	年中	男		3歳時に広汎性発達障害と診断。本人のこだわりが強く、文字や数をなかなか覚ええない。年中は自分の名前が読めなかったが、読み支援を受け、年長には読めるようになった。単語を読む際、読める字があると、それに引かずらされて、よく知っている単語を報告する。似ている形の文字が苦手。年中の時は、一人でいることが多く、虫取りやブロック遊びをしていた。年長にはみんなと遊べるようになったが、言葉の聞き間違いや聞き返しがあつた。言葉の遅れもあつた。先生や友達の名前が覚えられなかった。文字にあまり興味は示さず、絵も苦手だった。通級指導教室に通い、就学前でひらがな50音が読めるようになった。
2	年長	男	通常の学級	5歳で広汎性発達障害・ADHDの疑いと診断。軽度の知的障害。1歳3か月で歩き始めるが、行動が早く、言葉より先に叩く、かじるなどの行為やかんしゃくを起こすことが多かった。保育園では、感情のコントロールが苦手、言語の遅れ、言語理解が伴わない。発達支援センターでは、年齢相応に説明したり、話を理解したりすることは難しかった。
3	年長	男	特別支援学級(情緒)	3歳児健診で小児科医よりADHDを疑われる。家庭では、車から降りた時に飛び出し、何度注意されても行動が修正されにくい。うまくできないとめそめそしてふさぎ込む。保育園では落ち着きがなく、集団での指示が通りにくい。幼児向けの塾に通ったが、何度も同じことを教えられているのに、文字や数が定着しにくい。ひらがな一文字は読めるが、単語になると読めない。
4	年長	男	不明	多動性障害の診断を受け、服薬を勧められる。家庭では、多弁であり車の中でしゃべり続ける。言葉遣いが乱暴。違うと言われると怒る。幼稚園では、集団での指示が通りにくく、落ち着きがない。読み書きに関しては、学習教材への取り組みにはムラがあり、継続して取り組むことの難しさがあつた。COGNETプログラムを実施中文字に興味を示し「これなんて読むの?」と尋ねる頻度が増大する。
5	年長	男	不明	発達上の困難を感じ、療育機関での支援を受ける。視力や聴力に異常はない。
6	年長	男	通常の学級	始語は12か月、二語文は1歳6か月で言葉の遅れはなかった。幼児期はよく遊んでいたが、友達の名前を覚えられなかった。車や虫など好きなことはよく話をするが、文字には興味を示さなかった。レースカーや改造車、ミニ四駆に関する知識は大人顔負けである。
7	1年	男	通常の学級	特に気になる事はない。
8	1年	不明	通常の学級	就学前にひらがなを覚えることができなかった。
9	1年	男	通常の学級	落ち着きがない
10	1年	男	通常の学級	乳幼児期の発達状況に特に異常はない。幼児期に発達相談機関よりグレーゾーンと指摘される。
11	1年	男	通常の学級	初語は2歳5か月。1歳半健診で言葉の遅れがあり、医療機関を紹介され、中度知的障害・自閉症と診断される。就園前までデイサービスに通ったため、人見知りは改善される。幼稚園では指示を聞いて動くより、周りの園児の様子を見て動く。絵本の読み聞かせに興味がない。自分の名前は全体のままとまりとして理解する。文字と音とのマッチングはできていない。常に体を動かし、集中できないことを母は気にする。
12	1年	男	通常の学級	
13	2年	男	特別支援学級	2歳で広汎性発達障害の診断。6歳でADHDの診断。

注. 事例番号は表1に準じる

### (3) 「読み」に困難のある子どもの幼児期の状況の分析

「幼児期の状況」について KHcoder を用いて分析したところ、抽出された語は 187 語であった。しかし「歳」「前」など、それだけでは文中の意味と異なる語も含まれていたため、例えば「歳」は「1歳、2歳…」、「前」は「就学前、就園前」など、それぞれに意味を持つ1つの語句として強制抽出されるように語の取捨選択を行った。補正を行い再度分析した結果、抽出された語は 187 語であった。抽出語の出現回数は「言葉」「診断」「文字」は各 5 回、「ADHD」「興味」「遅れ」は各 4 回、「ひらがな」「覚える」「機関」「示す」「自閉症」「発達」「落ち着き」「理解」は各 3 回であった。抽出語で出現数 3 回以上の頻度の語を用いた共起ネットワークを図 1 に示す。

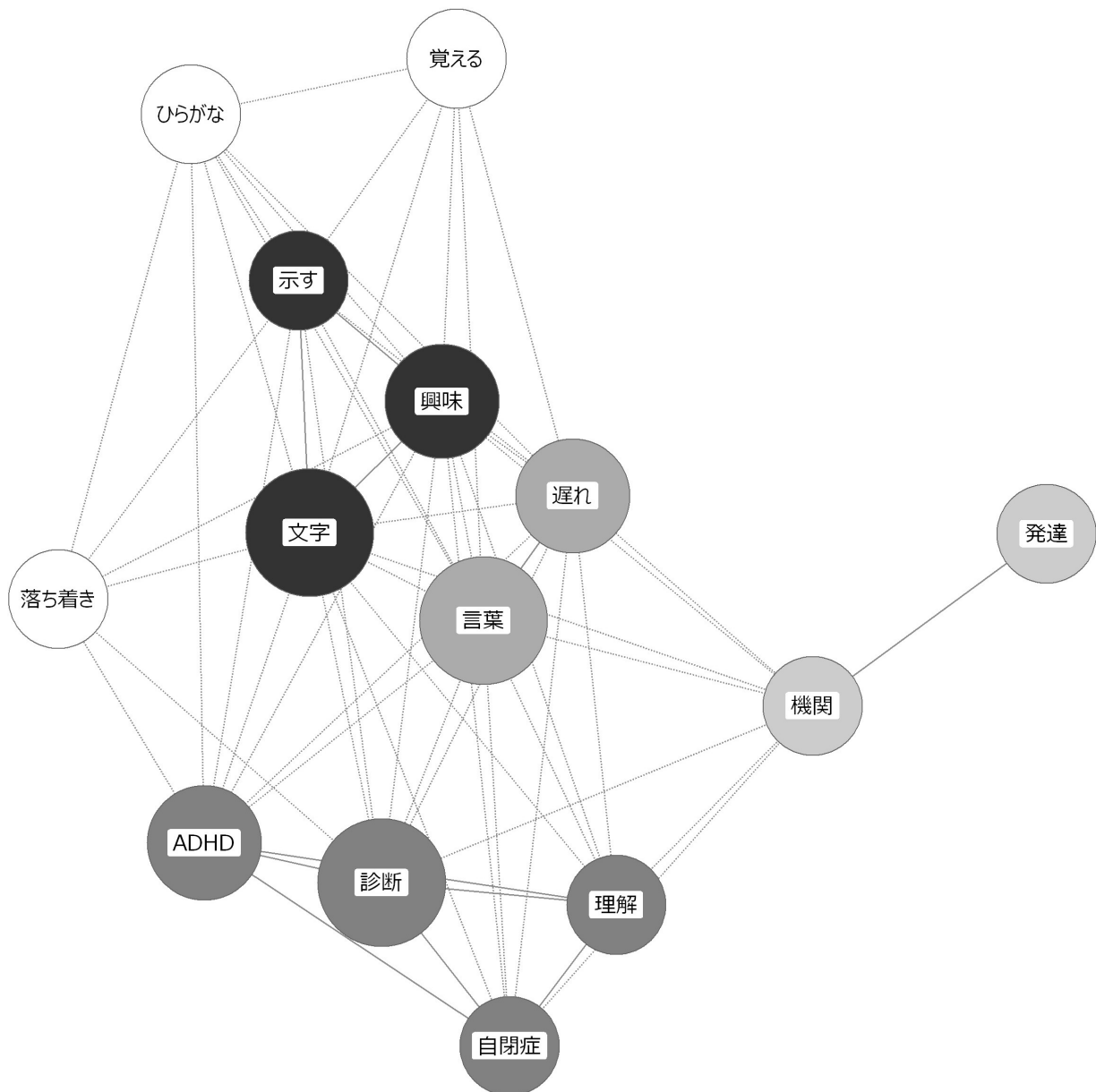


図 1 抽出された頻出語の共起ネットワーク

この図は、出現頻度が高いほど大きな円を描き、強い共起関係は太い線で、弱い共起関係は破線で描出される。また、結びつきが強い語を自動的に検出し、色分けによってグループ分けが行われるサブグラフ検出も併せて行った。

図1の線を見ると、「示す」と「興味」と「文字」は相互に強い共起関係を示す太い線につながれた。「遅れ」と「言葉」、「発達」と「機関」も互いに太い線につながれた。「理解」と「診断」と「自閉症」と「ADHD」は相互に太い線につながれた。他の語の線は全て破線であった。共起ネットワークのサブグラフ検出では、①「示す」「興味」「文字」、②「遅れ」「言葉」、③「発達」「機関」、④「理解」「診断」「自閉症」「ADHD」、の4つが検出された。

抽出語で出現数3回以上の頻度の語を用いた、階層的クラスタ分析の結果について、図2に示す。分析では、分散が最小になるようにクラスタリングするため、ユークリッド距離によるWard法を選択し、距離はJaccardを選択した。併合水準（比類似度：0になるほど、類似度は高くなる）を確認したところ、急速に比類似度が下がる箇所はクラスター数が5の時であったことから、クラスター数を5に設定して分析した。

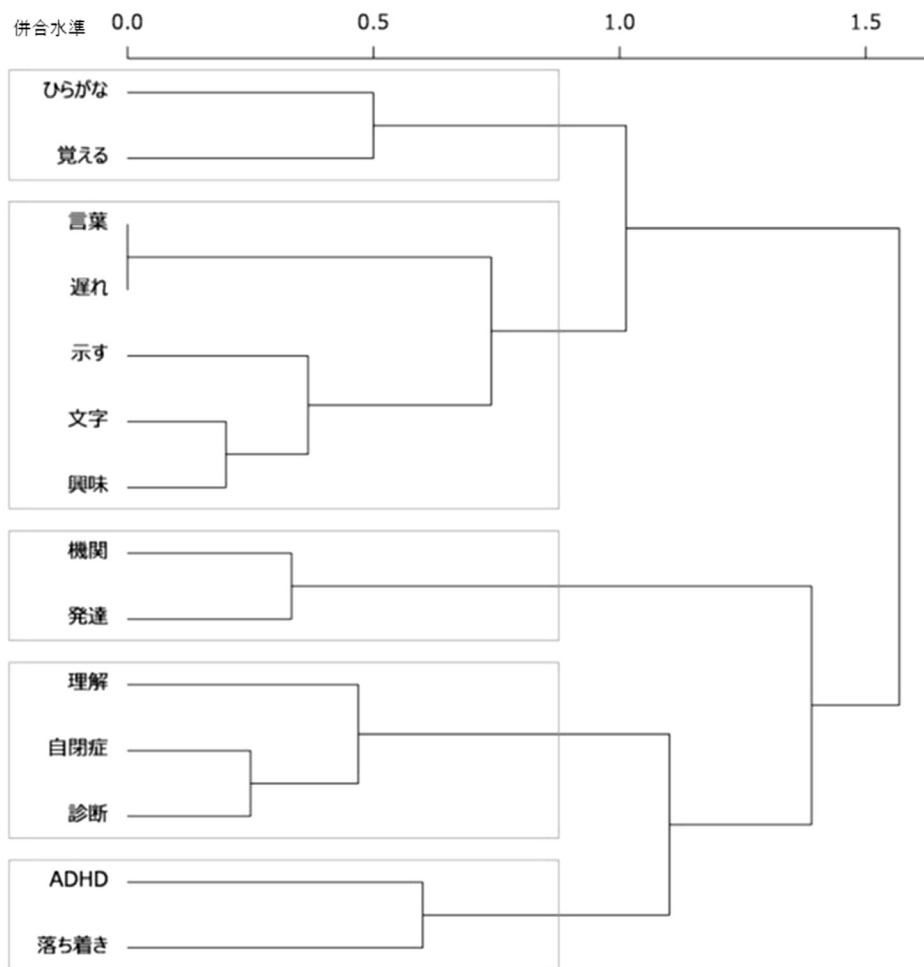


図2 抽出された頻出語の階層的クラスタ分析

階層的クラスタ分析の併合水準は、「言葉」と「遅れ」は0であり、いつも関連付けられていることが分かる。併合水準が0.5未満で関連づいている語は「文字」と「興味」、「機関」と「発達」、「自閉症」と「診断」であり、関連が強いことが分かる。出現回数3回以上である全ての語は、⑤「ひらがな」「覚える」、⑥「言葉」「遅れ」「文字」「興味」「示す」⑦「機関」「発達」⑧「自閉症」「診断」「理解」⑨「ADHD」「落ち着き」の5つに分類された。

## 4. 考察

### (1) 「読み」に困難のある子どもの幼児期の状況が記述されていた事例の概要

CiNii Articles でのデータベース検索の結果、児童の 280 件に対して幼児は 78 件と少なく、幼児期の読みの困難に対する研究は少ないことが分かる。幼児期の読みの困難に関する研究は児童期と比較すると発達途上にある感が否めない。分析対象となった 34 件のうち、幼児期に言葉の遅れや読みに困難があることが分かり、支援が開始された事例は 5 件とさらに少なくなる。また、入学後に読みの困難があることが分かり、支援が開始された事例は 29 件であったが、幼児期の状態について述べられている事例は 8 件にとどまり、残りの 21 件の事例には幼児期の状況については記述されていなかった。幼児期の状態について明らかにすることが各論文の目的ではないので、幼児期の状態について記載されている事例は少なかったが、幼児期の状態について全く触れられていないということは、幼児期には特筆すべき状態はなかったのか、あるいは保護者や保育者は文字が読めていなかったとしてもそれを特段問題として捉えていない可能性も考えられる。実際、事例 8 は児童期に dyslexia だと診断されるが、幼児期において気になる様子は捉えられていない。

### (2) 「性別」と「在籍学級」

性別は、男児が圧倒的に多い。在籍学級は、読みの困難以外に ADHD や自閉症等、幼児期から何らかの障害と診断されている場合は特別支援学級に在籍していることが多いようだが、入学後に「読み」に困難があることが明らかになった子どもが在籍している学級は通常の学級である。通常の学級に在籍している場合、通級指導教室に通う等、個別の支援が提供される場に通う場合を除き、個に応じた適切な支援を個別に受ける時間を捻出することは難しくなると予測される。「読み」に困難のある子どもが何らかの支援を得ることなく学年が上がれば、学習内容は学年を追ってより高度になっていくことから、内容の習得はより困難になっていくと推察される。

### (3) 障害を含む困難の認識と支援

幼児期の読みに関する困難の記述は、読みの困難が主訴ではなく、発達上の課題から副次的に把握されていると考えられる。実際、事例 3・4・5 では ADHD や多動性障害の行動上の問題がその主訴となっている（表 1）。つまり、幼児期には、子どもの周りの大人たちからすれば、行動上の困難が目立った行動として受け取られるため主訴となりやすく、読みの困難は主訴とはならないと推察される。これに対して、入学後は学習が始まることから、読み書きの困難が事例 7・10・12 のように学習上の困難となって表れたり、事例 8・10・11 のように行動上の問題となって表れたりしている。読み書きの困難はそれだけに問題がとどまらず、早期に支援がなされなければ、行動上の問題にも発展していく可能性がある。

分析対象とした 34 件のうち、明らかに dyslexia だと診断されたと記載があるのは 1 件（事例 8）だけであった。自閉症スペクトラム障害や ADHD、構音障害等、何らかの障害が記述されていた事例は 14 件であり、その割合は決して少なくないと言える。教育現場では読み書きの困難だけに焦点を当てて対応するというよりも、それ以外の困難にも合わせて対応していることが多いと推測される。これは



文部科学省（2012）「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」で報告された数値ともその傾向は合致する<sup>2)</sup>。

表1より各事例の困難認識学年と支援開始学年を比較すると、13件中6件では同じ学年の間に支援が開始されているが、7件ではその学年で支援が開始されていない。何らかの困難や読みに困難があると保護者や保育・教育者が認識するようになってからも、すぐに支援が開始されるわけではないことが分かる。また、支援者につながり、実際に支援を受けるまでには数年の時間を要することがあることも明らかになった。つまり、何らかの困難があると分かってからも、個別の適切な支援がなされるまでには時間がかかり、その間に何らかの支援が開始されない時は問題が深刻化する可能性は否定できない。

#### （4）「読み」に困難のある子どもの幼児期の様相

共起ネットワークのサブグラフ検出（分類番号①～④）と階層的クラスター分析の結果（分類番号⑤～⑨）から、「読み」に困難のある子どもの幼児期の様相について考察する。

①の語群「示す」「興味」「文字」は、⑥の語群の一部でもある。「示す」が用いられた文の前後を確認すると、「文字に興味を示す」「文字に興味を示さない」であり、幼児の文字に対する興味の有無を指していることが分かる。また、①の語群を除いた⑥の残りの語は「言葉」「遅れ」であり、これは②の語群に当たる。「遅れ」と「言葉」は、「言葉の遅れ」として用いられ、幼児の言葉に関する何らかの発達の遅れを表していると考えられる。

⑤の語群は「ひらがな」「覚える」であり、「ひらがな」が用いられた文の前後を確認すると、「ひらがなを読める」「ひらがなを覚える」とあり、ひらがなの習得について記述されていることが分かる。幼児が文字を読んでいる様子を表していると考えられる。

③⑦の語群は「機関」「発達」であり、療育機関や発達相談機関等の、発達相談に係る機関を指し示しており、「発達」が用いられた文の前後を確認すると、乳幼児期や幼児期の何らかの発達面における状況が関連付けられている。幼児期に発達相談に係る機関において何らかの発達に関わる困難な状況が見られることを表していると考えられる。

④の語群は「診断」「自閉症」「ADHD」「理解」であり、「ADHD」「自閉症」が用いられた文の後には「診断」があることから、幼児期にADHDや自閉症の診断を受けたり、疑いをもたれたりしたかどうかを表している。「理解」が用いられた文の前後を見ると「言語理解が伴わない」「話を理解することが難しい」「自分の名前は全体のまとまりとして理解する」となっており、通常、その年齢ならば理解している事柄が理解できていないことが記述されている。このような状態にある幼児（事例3と事例12）が自閉症やADHDと診断されていたために関連付けられたと考えられる。この2事例の幼児はどちらも程度の違いはあるかもしれないが知的障害と診断されている。本研究では、語の出現回数が3回以上の頻出後を分析対象の単語に設定したため出現回数が2回の単語である「知的障害」は分析対象に含まれなかったが、「理解」の語は知的障害と診断された子どもの様相をも表している可能性がある。

保護者や保育者、支援者は「読み」に困難のある子どもの、幼児期における困難をどのような指標から認識しているのかについて考察する。

幼稚園教育要領等に「言葉」が位置付けられているように、幼児の言葉の発達や獲得は保護者や保育

者にとって重要な事項として認識され、その発達や獲得度合いに注意を払っていると考えられる。この言葉の発達の延長線上に文字の発達は位置づけられる。そのため、保護者や保育者は幼児の言葉の発達や獲得状況の延長線上として、文字に興味や関心を持っているのかいないのかについても注意を払っている可能性がある。つまり「言葉の遅れ」という指標、「文字に興味や関心を示しているのか」という指標、この二つの指標があると考えられる。

これに対して、実際にひらがなが読めるのか読めないのかといった、文字の読みの習得度合いから保護者や保育者、支援者は幼児期の読みに関する困難を認識していると考えられる。無藤・秋田（2013）は、幼児期から小学1年生の家庭教育における調査において、年長児は「自分の名前を読める」の項目で、男子97.9%、女子99.1%が、「かな文字を読める」の項目で、男子92.1%、女子97.7%が読んだとしている。年長児はほぼ自分の名前やひらがなを読むことができるため、ひらがなの習得度合いが、幼児の読みの困難を認識する第三の指標となっていると考えられる。

第四の指標は、幼児期に発達相談に係る機関において、何らかの発達に関する相談を要する状況にあること、と考えられる。これらの機関と連携する中で、その年齢において理解できる事柄について理解できないことが明らかになる場合もある。あるいは、医療機関とつながって、自閉症やADHDと疑われたり、診断されたりすることもある。

診断された障害の中で、「ADHD」は他の障がいと異なり、「落ち着き」の語が関連付けられている。⑨の語は「ADHD」「落ち着き」であり、ADHDの子どもたちに見られる特徴の一つである落ち着きのなさが、より強く関連付けられている。久米・松本（2018）は、保育者に質問紙調査したところ、保育者は多動性・不注意の問題に注目しており、性別では男児が高い数値を示すと述べ<sup>3)</sup>、本研究ともその傾向は一致する。保育者は多動性のある男児における問題に注目しやすい傾向にあるため、それが第五の指標とされている可能性がある。

これらのことから、「読み」に困難のある子どもは幼児期に、①文字に対する興味を示さないことがあること、②ひらがなを読んだり覚えたりすることが難しいこと、③言葉に関する何らかの発達の遅れを示していること、④乳幼児期に何らかの発達に関わる困難な状況が見られ、発達に係る相談機関と関わりがあること、⑤ADHDや自閉症の診断を受けていたり、疑いをもたれたりし、あるいはその年齢ならば理解している事柄が理解できていない等の様相がみられることが明らかになった。また、保護者や保育者、支援者は幼児の読みの困難についての指標として、①文字への興味の有無、②ひらがなの読みの習得度、③言葉の遅れなどの何らかの発達上の困難について、発達相談機関において教育相談等の連携が図られているか、④医療機関で何らかの障害と診断されているか、⑤落ち着き具合、の5つの指標から読みに関する困難のある幼児を認識していると考えられる。

## 5. まとめと今後の課題

本研究では「読み」に困難のある子どもの出版されている論文の事例から、幼児期における読みに関する困難のある幼児期の状況を抽出し、その様相を明らかにした。しかし事例が少なかつたことから、抽出された語のうち出現回数が2回の単語は分析しておらず、「読み」に困難のある子どもの幼児期の様相を

全て捉えきれていない可能性はある。今後は事例の数を増やし、幼児期の読み関する様子の特徴となる単語の数を増やして分析する必要がある。また、幼児期に見られるその様相は子どもが成長発達するに従って変化していくと考えられることから、児童期の様相についても明らかにしておく必要がある。

本研究はあくまで文献上で見られる幼児期の様相であり、支援者が保護者や保育者・教員から子どもの状況について聞き取った子どもの様相である。今後は、実際の保育・教育現場において、教員は「読み」に困難のある子どもの様子をどの様にとらえ、また認識しているのかについても調査し、今回の結果と比較して検討していく必要がある。

保育現場における幼児の状況を中心に支援を考えれば、まずは保育現場において見られる幼児の困難さの度合いに応じて、支援が必要となる。保育者は ADHD の落ち着きのなさを一つの指標としているように、実際の保育現場では子どもの落ち着きのなさに対する支援が求められている。「読み」に困難のある子どもの多くは ADHD や自閉症等と診断されていることから、読みの困難さについても支援が必要なのかどうかについて目を向ける必要がある。また、事例の 85% の子どもは入学後に読みの困難が発見され、支援の開始が数年後の子どももいることを考えれば、読みの困難について早期に発見するシステムを構築することも、早期発見・早期支援を行うための手段の一つとして考えられる。

ただしその場合、自戒しておかなければならないことがある。文字の読みの状態を問うとき、読みの習得度について注目することになる。幼児期の読みに関する能力は個人差が大きく、読みに興味や関心がないように見えたとしても、入学後に急速に文字の習得が進む子どもはいる。文字の習得度だけがクローズアップされれば、ひらがな 50 音の読みができるようになることが重要であるとされるおそれがある。事例 2 では通級指導教室で読みに関する支援が開始され、就学前にひらがなの清音 50 文字は読むことができるようになった。しかし、入学後も読み書きに対する問題は継続している。ひらがなの読みの習得度のみにとらわれることなく、その背景となる読みに関わる能力にも目を向けることが重要である。早期発見そして支援にあたる教員や支援者は、ひらがなの習得度を上げるための支援ではないことを自戒し、保護者に対してはその様に受け止められることがないように努めていく必要がある。

更に加えるならば、文字の読みについても、幼児期の教育と小学校教育との円滑な接続を図ることが必要となろう。接続期のアプローチカリキュラムやスタートカリキュラムにおいて、互いの教育内容の深さや広がりを中心に理解し、それぞれの教育内容を充実させていくことが重要である。ここからは憶測の域を出ないが、文字の読みは小学生になって学習するので入学後に支援すればよい、幼児期にひらがなの読みはほぼ習得しているのだから、小学校からは読みよりも書く指導が重要だ、などという意識が教員にあるとすれば、「読み」に困難のある子どもはその狭間で読みに困難を抱えたままになってしまふ可能性が高い。もし、その様な意識があるとすれば、読みに関する認識のパラダイム転換を行う必要もあるのかもしれない。今後は保育所や幼稚園等の保育者の読みに関する意識や小学校の教員の読みに関する意識についても調査する必要があると考える。

<注>

- 1) 樋口 (2020:183) は KHCoder による分析は、従来の Dictionary-based アプローチに加えて多変量解析による手段を加えたことで、分析の客観性ないしは信頼性が向上し、分析者と第三者が共有しうる客観的な資料にできる (樋口 2020:28-29) としている。また、樋口 (2020:183) は共起関係を全て線として描くと、画面が線で埋まってしまうことが多いので、描画する共起関係を強いものに絞らなければならないとしている。加えて、共起関係の強弱を図るために Jaccard 係数を算出するとしている。Jaccard 係数とは類似性の指標であり、語と語の間の共起関係を表すものとして広く使用される。ノードとは分析に使用される語やコードの事であるが、本研究では、出現度 3 回の語で分析を行うため、ノードを 3 とした。
- 2) 文部科学省 (2012) 「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」では、小学校第 1 学年の通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある児童生徒の中で、学習面又は行動面で著しい困難を示す割合は 9.8%であった。学習面で困難を示す割合は 7.3%、「不注意」又は「多動-衝動性」の問題を示す割合は 7.3%、「対人関係やこだわり等」の問題を示す割合は 1.5%であり、合算すれば 13.3%である。困難を示した割合と合算した割合との差は 3.5%となることから、この中には何らかの著しい困難を併せ持つ児童が存在していることが分かる。
- 3) 久米・松本 (2018) は幼稚園等の保育者に対し、厚生労働省が軽度発達障害の簡易スクリーニングツールとして紹介している、幼児期から就学期 (およそ 4~16 歳ぐらい) の子どもを対象にした行動スクリーニングのための質問紙「Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ)」を使用して質問紙調査を行ったところ、保育者は多動性・不注意の問題に注目するとしている。

<参考文献>

- 青木真純、室谷直子、増南太志、松沢晴美、高野知里、岡崎慎治、前川久男 (2013) 「就学後に学習のつまずきが予想される幼児に対する COGENT プログラムを用いた指導の効果」『障害科学研究(筑波大学)』37、13-26
- 福田亜矢子 (2018) 「不安障害の発症により発達性読み書き障害に気付いた児童の 1 例」『日本プライマリ・ケア連合学会誌』41 (1)、15-17
- 船橋奈生子、恵羅修吉、馬場広充、田中栄美子、秋山嘉光 (2013) 「字形が類似したひらがなの弁別に困難のある就学前幼児を対象とした文字指導に関する事例研究」『香川大学教育実践総合研究』27、91-104
- 原 恵子 (2008) 「通常の学級・通級における音韻のアセスメント」『LD 研究』17 (3)、290-294
- 樋口耕一 (2020) 『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版
- 今井和子、西山 健 (2016) 「読み書きに困難さを示す児童への早期支援 (1) スクリーニングテストの結果を中心に」『ろう教育科学』58 (1)、27-37
- 石塚誠之、増子智也、佐賀美彩香、金曾美来、大窪莉叶、小林楓花、濱野真悟 (2018) 「読字障害が疑われる児童に対する早期読み指導に関しての予備的研究」『北翔大学北方圏学術情報センター年報』10、9-23
- 岩山カイナ (2019) 「行動面と読み書きに課題のある小 2 児童の指導方法の検討：KABC-II と WISC-IV からの解釈とことばの発達に着目した支援」『K-ABC アセスメント研究』21、53-62
- 垣花真一郎、安藤寿康、小山麻紀、飯高晶子、菅原いづみ (2009) 「幼児のかな識字能力の認知的規定因」『教育心理学研究』57 (3)、295-308
- 久米紗生、松本有貴 (2018) 「保育者の『気になる子』の早期発見・早期支援のために一簡易質問紙によるスクリーニング (SDQ) の有効性の検討一」『徳島文理大学研究紀要』96、135-141

- 国立国語研究所（1972）『幼児の読み書き能力』東京書籍
- 厚生労働省（2017）『保育所保育指針』
- 文部科学省（2012）『通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について』
- 文部科学省（2017）『幼稚園教育要領』
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2017）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』
- 太田静佳、宇野 彰、猪俣朋恵（2018）「幼稚園年長児におけるひらがな読み書きの習得度」『音声言語医学』59（1）、9-15
- 無藤 隆、秋田喜代美（2013）『第1回 幼児期から小学1年生の家庭教育調査 報告書』2012年度報告書 ベネッセ次世代研究所
- 坂野久美子（2011）「自己肯定感の低下と注意集中・読み書きの困難をもつ児童への心理教育的支援」『学校臨床心理学研究：北海道教育大学大学院研究紀要』9、95-102
- 迫野詩乃、伊藤友彦（2015）「幼児の読みと非語の復唱との関係 ―逐字読み群と流暢読み群との比較―」『特殊教育学研究』53（2）、89-96
- 島村直己、三神廣子（1994）「幼児のひらがなの習得―国立国語研究所の1967年の調査との比較を通して―」『教育心理学研究』42（1）、70-76
- 上村逸子、森山貴司、高橋順治（2009）「『読み書き』につまずきのある児童への指導に関する一考察（Ⅱ）：通級指導教室での事例を通して」『障害児教育研究紀要(大阪教育大学)』32、19-30
- 氏家享子（2019）「読み書きに困難を示す児童への学習支援実践:学習に対する抵抗感に配慮したかわり」『東北福祉大学教育・教職センター特別支援教育研究年報』11、15-23
- 山下公司、小野寺基史（2019）「知的障害が疑われた読み書き困難のある児童への読み書き指導:通級指導教室での取組」『K-ABC アセスメント研究』21、43-51
- 横山依子、武藏 博文（2015）「特別支援学級に在籍する対象児童の主体的な取り組みを目指した読み書きの個別指導・支援」『香川大学教育実践総合研究』31、81-94
- 芳倉優富子、玉村公二彦（2015）「読み書き障害児への支援としての DAISY の活用：通級指導教室の指導と通常学級での指導との連携を通して」『次世代教員養成センター研究紀要（奈良教育大学）』1、303-309